40周年に寄せて

阿部幸泰

西多賀重症児(者)親の会40周年、おめでとうございます。

西多賀病院重症児病棟開設以来、指導員として35年近く親御さんたちとも係わって来 ただけに、感慨深いものがあります。

お祝いの言葉と共に、親御さんの気持ちに十分に寄り添えたかとの反省もあり、お詫び を申し上げたい心境です。

さて、独立行政法人化や障害者自立支援法施行に伴う様々な問題点を見聞するにつけ、 「40周年」を機に、改めて親の会の存在意義が問われるのでないかと思います。

例えば、障害者自立支援法施行に際し、「重症心身障害児施設の入所者に対する福祉サービスについては、現行のサービス水準を後退させることなく、継続して受けられるよう配慮すること。」と国会で付帯決議されたはずですが、全国の旧国療に指導室(指導員、保育士)の存在すら疎かにされがちの動きも見られるとか。

こうした療育の質の問題に、親の会はお子さんを代弁して、どう発言しようとしている のか、気になるところです。

40年前の西多賀病院重症児病棟開設の報道記事の中に、「重症児は入所すればそれでこと足りたとするのでなく、集まった子ども一人一人の療育について考え得る施設でなければ作る意味がない。」と記載されています。

時代の変遷と共に運営形態、福祉制度等が変わろうと、重症児(者)と呼称されるお子 さんたちの生活の質の根源的問題は、変わることなく存在し続けているはずです。

時代の変遷に惑わされることなく、こうした視点から、入所、在宅に拘わらず重症児問題に、これからも発信する西多賀重症児(者)親の会であり続けるように、陰ながらエールを送くらせていただきます。